

「長屋王家木簡」 関係発掘調査の概要

1988年10月29日

花谷 浩

1 はじめに

そごう建設地に対する発掘調査は、敷地面積約4万㎡のうち3万㎡を調査対象とし、1986年10月から開始した。これまで約2年間に5次にわたる調査で、このうち約1万7千㎡の調査を終了し、調査成果をその時々公表している。

そごう建設地が平城京の中で占める位置は、北を二条大路、東を東二坊々間路、南を三条々間路、西を東一坊大路に囲まれた、左京三条二坊一・二・七・八坪にあたり、この4つの坪をほぼ含んでいる。

調査の結果、この宅地は平城京造営の時点から4坪を一つの宅地として使うため、それを分割する道路（坪境小路）が設けられなかったことや、奈良時代前半には、建坪340㎡の主殿を初めとする大規模な建物が立ち並んでいたことがわかった。しかも、この場所が奈良時代初めの政権中枢を占め、天平元（729）年に悲劇的な死をとげた長屋王の邸宅地であった可能性が強いということも、出土した木簡から推定されるにいたった。

7月からの調査は、東二坊々間路西側溝、邸宅地東北隅、184・186次調査区の間にあった未着手部分など6ヶ所の調査を行い、後に述べるように「長屋王家木簡」の発見という貴重な成果をあげることができた。総調査面積は約3千㎡である。

2 調査の概要

①第186次調査補足

184次調査区・186次調査北区の間に残った未調査部分の調査。検出遺構は掘立柱の建物5棟以上、堀10条以上、道路1、井戸3基、溝、土壇など。東西堀（堀4）は、長屋王邸の主殿を含む中心区画の北面の堀である。柱間9尺で建て替えがあり、A2期の東面の堀（堀2）には取り付かないことが新たに分かった。井戸は3基とも奈良時代後半に属し、縦板組方形の井戸である。

②第193次A区

東二坊々間路西側溝と七・八坪々境小路東端部分の調査を目的とする地区。西側溝は幅3m、深さ1～1.2mあり、奈良時代の中頃に埋められている。土器・瓦・木器・木簡などが多量に出土した。東二坊々間路は路面幅5.5m、東側溝は幅4m以上の巨大な溝である。調査区南端には奈良時代以前の河道を改修した導水路があり、これと側溝との接続部を確認した。この導水路の北、西側溝の西3mの所には、長屋王邸の東辺を限る掘立柱南北堀（堀1・柱間19尺）がある。この他、邸宅の東門や後半代の七・八坪々境小路と東二坊々間路との関係を明らかにした。

③第193次B区

A区の北、長屋王邸（三条二坊八坪）の東北隅に設けた調査区。宅地の東北隅を確認したほか、二条大路南側溝、東二坊々間路西側溝の他、掘立柱建物3棟以上、掘立柱堀1条、築地堀木樋暗渠などを検出した。

二条大路南側溝は幅2.6m、深さ0.9mあり、中層の木屑層・粘土層から木簡・土器がまとまって出土した。坊間路西側溝の西側にはA区から続く長屋王邸宅地の東を限る堀1があるが、この堀は北辺にはめぐらない。二条大路南側溝・東二坊々間路西側溝と宅地との間には雨落ちの溝があり、宅地東北隅には、築地の下をくぐってこれに注ぐ木樋暗渠がある。掘立柱建物は東の柱列を検出しただけである。

④第193次D区

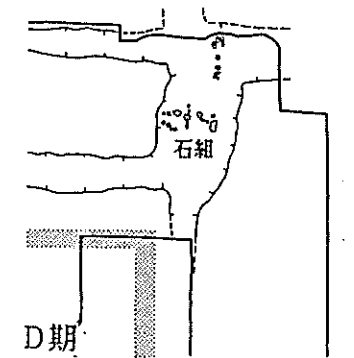
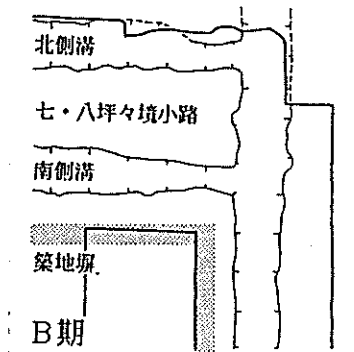
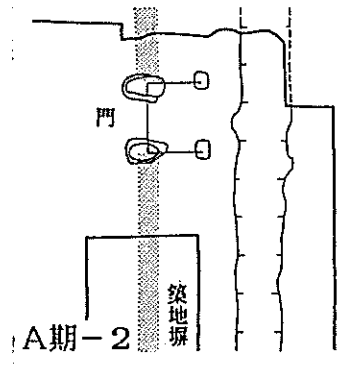
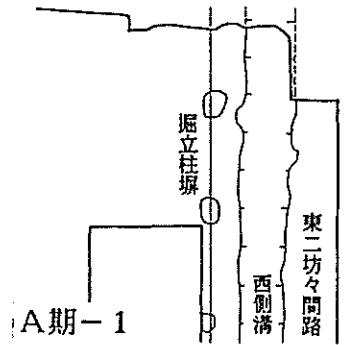
193次A区の西側に隣接する調査区。検出した遺構は、掘立柱建物11棟以上、掘立柱堀4条以上、井戸2基、土壇、溝など。掘立柱建物のほとんどは比較的小規模のものだが、調査区東辺の倉庫と推定される2棟の掘立柱建物は規模が大きい。2棟は柱筋を揃えて南北に並び、両者の間隔は約6m（20尺）ある。北の建物（建物1）は総柱で、東西・南北とも3間と推定される。南の建物2は3×4間で、南に庇か縁がつくと考えられる。柱間は2棟とも南北が6尺、東西が7尺である。

⑤第193次E区

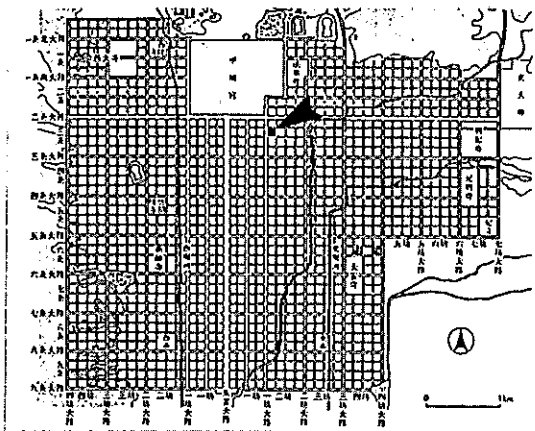
「長屋王家木簡」発掘のために設けた調査区である。193次A区の北、186次調査北区の東方で、昨年末に「長屋皇宮」木簡が出土した井戸からは約45mを隔てる。木簡が出土したのは幅3.0～3.4mの南北方向の溝で、21m分を調査した。溝の深さは最も深い北端で80cmあり、堆積は4層に分かれる。第3層は木簡を多量に含む木屑層であった。木屑層の発掘はこの層を土ごと採取する方法で行ない、その量は整理箱1000箱にのぼる。遺物は一括して捨てられた状況であった。

3 まとめ（調査の成果）

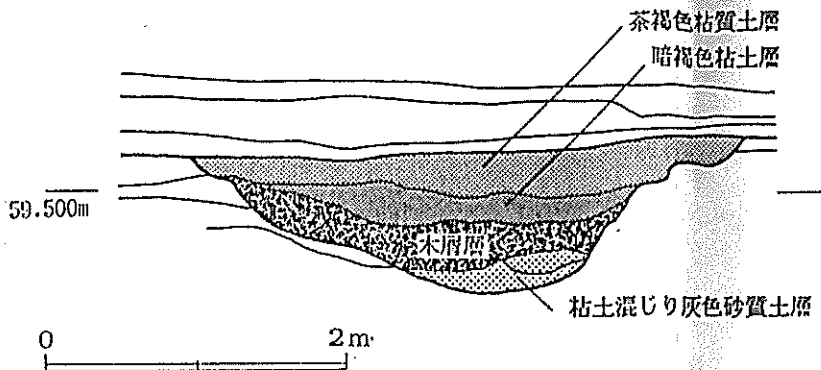
- 1) 「長屋王家木簡」の発見により、調査地が長屋王邸宅地であることが確定した。木簡の総数は3万点に及ぶものと推計される。
- 2) 邸宅地中心部北面の堀と東二坊々間路に面する東限の堀および東門を確認した。
- 3) 邸宅地東部に倉庫群を伴う一郭があったことが判明した。
- 4) 東二坊々間路とその東西両側溝を発掘し、西側溝が後半になくなること、導水路が西側溝と接続することがわかり、また小路との交差点部の状況も明確になった。



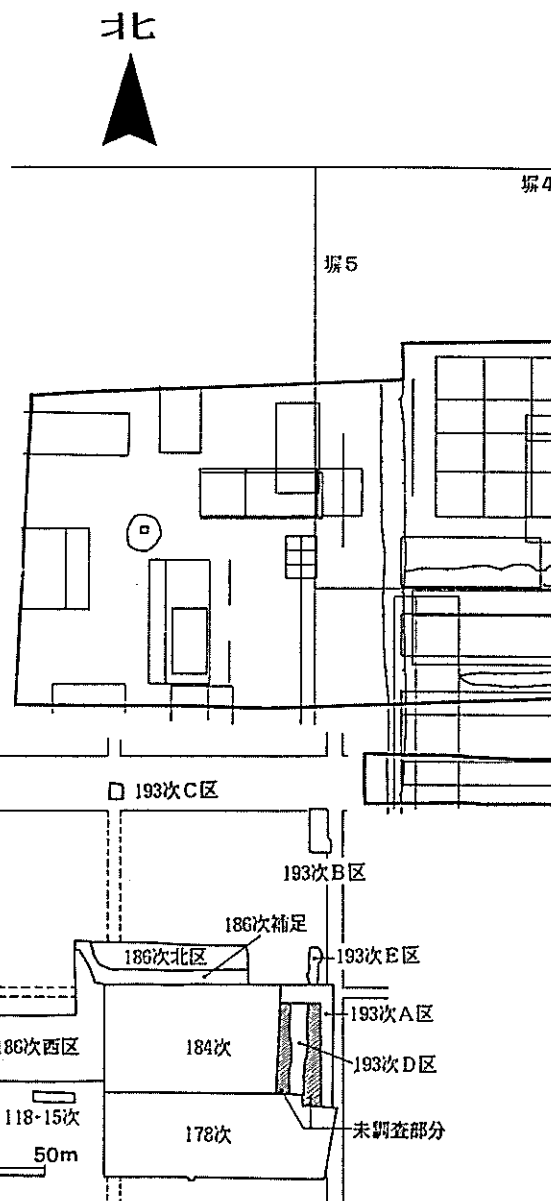
第193次A区
北側溝・東二坊々間路



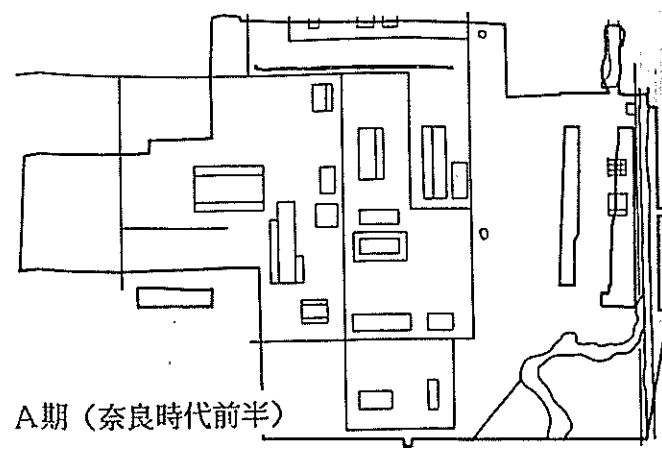
調査位置図



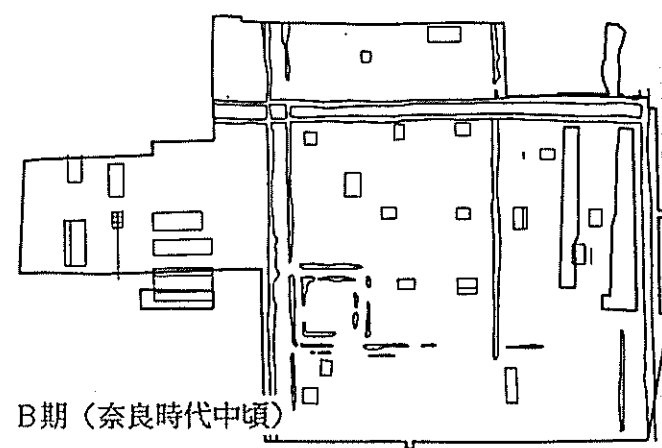
「長屋王家木簡」出土溝断面図
(193次E区)



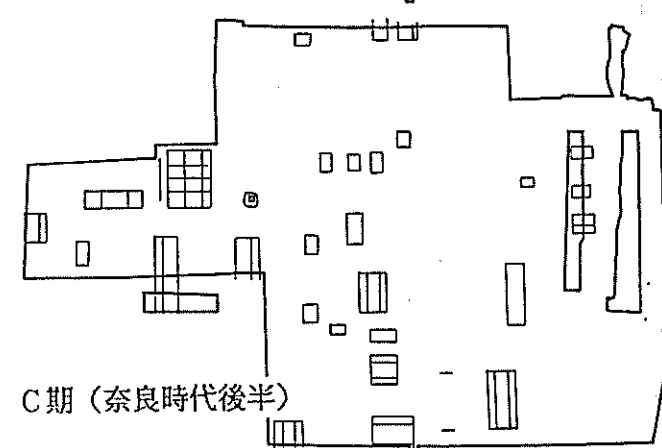
調査位置図 (Investigation Location Map)



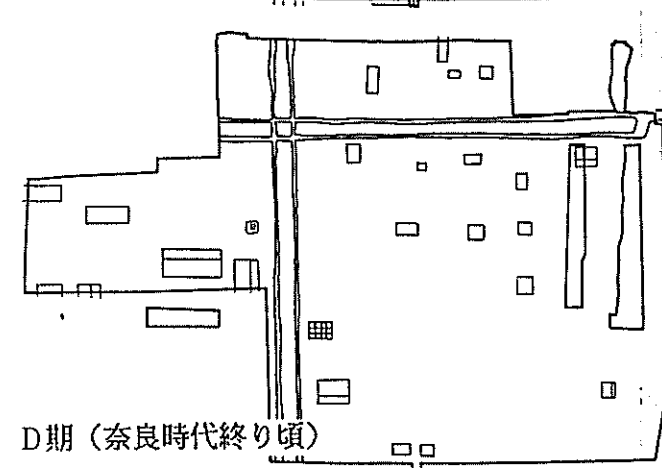
A期 (奈良時代前半)



B期 (奈良時代中頃)



C期 (奈良時代後半)



D期 (奈良時代終り頃)

遺構変遷図 (A~D期)